様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０９８８

研究課題名（和文）地域の生存戦略と「日韓交流」：近現代対馬における交通・接触・他者表象

研究課題名（英文）"Japan-Korea exchange" and the survival strategies of the local societies in contemporary Tsushima island

研究代表者
村上　和弘（MURAKAMI, Kazuhiro）

愛媛大学・国際連携推進機構・准教授

研究者番号：４０３６３２６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円

研究成果の概要（和文）：近年の対馬は「国境の島」として知られるが、歴史的経緯を踏まえて調査・分析を行った研究成果は極めて乏しい。本研究では対馬を地域社会の複合体として捉え、各地域社会の「生存戦略」との観点から「日韓交流」に関する諸事象の調査・分析を行った。具体的には、日韓交流イベントとして知られる「朝鮮通信使行列」パレードの変遷を地域社会の文脈に位置づけて分析し、当初は地域の歴史に題材をとった仮装行列的な「出し物」が、やがて観光パレード、そして日韓交流イベントとして読み替えられていった経緯を明らかにした。また、交通史調査を通じて戦前・戦後の朝鮮半島との交流実態の解明を行った。

研究成果の概要（英文）：Presently, Tsushima island, Japan, is well known as “a border island", but there are almost no historical studies or analysis of how it came to be called so. In this research project Tsushima was first regarded as a complex of local societies, and research and analysis of matters related to the "Japan-Korea Exchange” was carried out from the point of view of the “survival strategy" of each social group. More specifically, the Tsushima "Joseon Delegation procession", which is well known as a typical event of "Japan-Korea exchange", was analyzed from the context of the local social groups. The event started as a costume parade for the entertainment of the local people, but the character of the parade was later modified to attract sightseers, and it has since evolved into a "Japan-Korea exchange” event. This research project followed this process from before WWII to after WWII by examining the records of people traveling by sea between Tsushima and the Korean peninsula.

研究分野：文化人類学・民俗学

キーワード：対馬　日韓交流　交通史　生活史　離島

１．研究開始当初の背景

2010 年時点の対馬は「日韓交流の島」として知られており、その背景には歴史資源を活用した日韓交流イベントの存在や韓国人観光客の大量来島現象などがあった。しかし住民たちは「日韓交流」のスローガンと現実に観光客を受入れる際のトラブルとの間で葛藤を抱えており、また、その葛藤のあり方も南部と北部とでは大きく異なっていた。

現在の事象については、韓国人観光客の大量来島現象を地理学的アプローチから調査した[助重雄久 2007]の観光研究や「朝鮮通信使」パレードを扱った[申鎬 2003][小田博志 2010]などがある。しかし前者は調査時点での現状分析にとどまっており、歴史性への視線にかける。後者は、朝鮮通信使＝日韓交流・善隣友好のイメージが島外に発信・受容されていく過程を分析するが、根強い負の「韓国」イメージのもと、今もパレードを実施しつづける地域住民の実践状況には触れようとしない。また、「日韓交流」イメージ自体が、島内他地域との対抗関係から自治体レベルで採用された名付け／名乗りである点にも無自覚であるようだ。これらの点から、本研究においては地域における生活実践に着目し、近現代の状況を踏まえた上で現在の「交流」現象の解明を図ろうとした。

(参考文献)
小田博志 2010　「よみがえる朝鮮通信使～対馬をめぐる記憶の技法のエスノグラフィー～」、『エスノグラフィー入門』、春秋社
申鎬 2003　「厳原港まつり・対馬アリラン祭について－観光人類学からみた予備的考察」、『韓国言語文化研究』(九州大学韓国言語文化研究会)、第４号
助重雄久 2007　「長崎県・対馬におけるインバウンド観光の展開と課題」、『離島研究 III』(平岡昭利編)、海青社

２．研究の目的

本研究では国境地域における生存戦略としての「交流」現象の立体的解明を試みた。そのために、まず対象とする時期を、戦前の国境が消失していた時期、戦後再形成された国境により半島との交通が遮断されていた時期、そして現在の交通路が再開設された時期の３つに大別し、各時期における「韓国(朝鮮半島)」「本土」との交通・交流の実態の解明を試みた。次に、地域を北部地域・南部地域に大別し、各時期における「日韓交流」戦略の展開を把握する。そして第三に、以上を通じて対馬における各地域住民の「韓国」観／「本土」観を解明しようと試みた。

３．研究の方法

研究課題の遂行に際しては、現地調査(参与観察・インタビュー)および文献調査を併用した。

研究計画は 4 年度にわたるが、全計画年度を通じ、いわば「定点観察」対象として「厳原港まつり対馬アリラン祭」(2013 年度より「対馬厳原港祭り」に改称)の参与観察・関係者インタビューを行った。「アリラン祭」は対馬における代表的な日韓交流イベントと目されており、メインイベントたる「朝鮮通信使行列パレード」の存在もあいまって、地域住民のみならず、日韓両国のマスメディアからの関心も高い。この時期は「日韓関係」が話題になりやすく、参加者か否かを問わず、人々の「韓国」観が表明されやすい。また、内外の状況を敏感に反映し、毎年、開催内容や規模が変化している。開催内容を記録し、変更理由を関係者・資料等から確認することで、調査時点における「韓国」観のゆれを定点観測的に把握することが可能である。

これと並行し、戦前期から戦後における島外・島内の交通の変遷に関する現地調査を行った。まず島外交通については、対馬北部の比田勝・佐須奈および周辺地区において聞き取り調査を実施した。戦前の両地区は釜山への定期航路の寄港地であった。また島内交通の変遷に関しては東沿岸部の各集落を中心に調査を行った。交通史に関する文献資料が乏しいなか、当時を知る体験者の聞き取り調査を併用することによって資料の集積を行った次第である。

また、国会図書館、長崎歴史文化博物館等での文献収集も実施した。

４．研究成果

(1)研究年度における研究成果

近年の対馬は「国境の島」として知られるが、歴史的経緯を踏まえて調査・分析を行った研究成果は極めて乏しい。本研究では対馬を地域社会の複合体として捉え、各地域社会の「生存戦略」との観点から「日韓交流」に関する諸事象の調査・分析を行った。

まず、対馬島内で開催される日韓交流イベントの代表的存在として知られる「朝鮮通信使行列」パレードの変遷を、地域社会の文脈に位置づけて分析した。同パレードは「厳原港祭り対馬アリラン祭」(毎年 8 月第１土曜・日曜開催)のメインイベントとして実施されている。だが、開催地である厳原(いずはら)においては、この「通信使行列」ひいては「日韓交流」をめぐる動きに対して、好悪相半ばする地域感情が存在している。その典型的な例が、2012 年秋に発生した仏像盗難問題を受けて 2013 年度に行われた「通信使行列」パレードの開催中止、および親イベントの名称から「アリラン祭」の語を削除し、「対馬厳原港祭り」に改称したことである。このように、開催地・厳原においては以前から日韓交流に対する反発の感情が根強く存在しており、「通信使行列」および「アリラン祭」の名称は、往々にして、それらの反発の焦点になりがちな存在でもあった。言い換えれば、「通信使行列」パレードおよび「アリラン祭」

の変遷は、開催地・厳原における「日韓交流」をめぐる認識を探るための大きな手がかりでもある。

このような認識から、本研究では参与観察・関係者へのインタビュー、そして文献調査を併用し、「朝鮮通信使行列」パレードの成立経緯から現在に至るまでの変遷を明らかにした。1980 年に公式開催された同パレードの当初の目的は、地域の歴史に題材をとった、イベントの華やかさを演出するための仮装行列的な「出し物」であった。だが、やがて江戸時代の善隣友好を象徴する「通信使」の再現パレードとして、特に韓国側から注目が高まっていく。そして 90 年代に入ると、同パレードは自治体の観光振興策の一環として、日本国内向けに「異国情緒」、すなわち異国としての「韓国」的要素を打ち出すことでエキゾティズムを演出するための素材として位置づけられることになった。さらに、国内からの観光誘致に進展が見られない中、1999 年の韓国との直行航路開設(当初は不定期航路)を契機として、「通信使行列」は、対馬における善隣友好を象徴する「日韓交流」のイベントとして読み替えられていったのである。

(2)得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

対馬は「国境の島」として、近年、マスメディアのみならず日韓両国の研究者からも注目を集めている。だが、2000 年代以降に見られる研究の多くは、韓国との直行航路開設以降の事象に終始しており、表層的な理解にとどまっているものがほとんどである。これらの研究成果に対し、調査・研究の基盤を対馬島内の地域社会に置き、そこに生きる人々の営みとの関連で対馬における「日韓交流」現象を読み解こうと試みてきた。また、本研究課題においては、「交通と交流」という観点から、島内の地域間関係にも留意しつつ、地域社会の複合体として「対馬」を記述しようと試みてきた。このような観点を有する研究は、管見の限り、宮本常一以降、ほぼ皆無に等しかったと言っても良いだろう。

国外におけるインパクトについては、(1)に記述した成果に加え、対馬全体を視野に入れての「小地域の複合体としての対馬における＜日韓交流＞」に関する論考をまとめ、韓国・蔚山大学校に博士論文として提出し、学位を得た。2000 年代以降、韓国においても対馬に関する研究者の関心は高まっているが、多くは室町期・江戸期の「通信使」研究であり、さもなければ領土帰属に関する、少なからずイデオロギーが先行する研究が目立つ。「今、そこに生きる人々」を対象とした筆者の研究成果は、このような研究状況に一石を投じるものであるだろう。

(3)今後の展望

対馬は近代以降、国境の消滅と再形成、あるいは経済情勢の変化等に伴い、位置づけが大きく揺れ動いてきた地域である。本研究は、変動する国際情勢のもと、現実に国境に直面するなかで人々が選択してきた交流戦略の解明を図るものであり、近現代対馬における「日韓交流」の研究自体が乏しい中、国境における地域社会の維持に関しても貴重なデータと知見をもたらす。また[宮本常一 1969]が述べるように、離島にとって交通は特に重要なテーマであり、交通の変遷を生活史あるいは日韓交流史等の調査成果と重ね合わせることで、更なる発展も可能であろう。

ただし、現在の対馬において「韓国」をめぐる言説はきわめてセンシティブな話題でもある。これは 2000 年代に以降に見られる韓国人観光客の大量来島現象、および 2012 年秋に発生した仏像盗難問題の影響が大きい。ある程度まで胸襟を開いて語ってくれる存在として見なされるよう、研究者としての精進を重ねることが、何よりも重要であると考えている。

また、島外との関係に目を向けると、対馬市の主導で設立された自治体間ネットワーク「朝鮮通信使縁地連絡会」で、史実としての「通信使」のユネスコ世界遺産登録を目指す活動が始まるなど、対馬=国境の島=日韓交流の島というイメージを利用した新たな地域振興の動きが見られる。日韓の各自治体が「通信使」をキーワードに連携しており、現時点では島内での動向に直接影響を及ぼすまでには至ってはいないが、今後が注目される。

参考文献

宮本常一 1969(初出 1955) 「おくれをとりもどすために」、『日本の離島　第１集』(著作集４)、未来社

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4 件）

① 村上和弘(2015) 「対馬における島外・島内交通の様相－戦前期の海上交通を中心に－」、『人間文化研究機構　連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」最終年度成果報告書』、pp.228-235、査読無

② 村上和弘(2014) 「「上書き」される朝鮮通信使--対馬・厳原における<日韓交流>をめぐって」、『東アジア近代史』17 号、pp.21-37、査読無

③ 村上和弘(2013) 「「厳原港まつり」の 50 年－地域振興と日韓交流のはざまで－」、『人文学論叢』(愛媛大学人文学会)15 号、

pp.101-116、査読無

④　村上和弘(2012)　「キッチュとしてのマツリ－対馬・厳原の「朝鮮通信使行列」パレードを題材に－」、『比較日本文化研究』15 号、pp.64-74、査読有

〔学会発表〕（計　6 件）

①　村上和弘、「近現代対馬における人と物の交流－「語られる歴史」と「語られない歴史」をめぐって－」、国際学術検討会「東亜文化交流：人と物の流通を中心に」（主催：浙江工商大学東亜研究院(中国)、蔚山大学校日本語日本学科(韓国)、早稲田大学日本宗教文化研究所(日本))、2015.03.20 発表、於・温州市(中華人民共和国)

②　村上和弘、「移動する商業者たち～対馬における戦前・戦後期の事例より～」、日本島嶼学会 2014 年次大会、2014.09.06 発表、於・五島福江総合福祉保健センター(長崎県五島市)

③　村上和弘、「多層化する朝鮮通信使 －対馬・厳原における＜日韓交流＞をめぐって－」、東アジア近代史学会第 18 回研究大会(大会シンポジウム「『境界』認識の変容と活用－ 国境把握をめぐる知識の現在形 －」)、2013.06.16 発表、於・中央大学多摩キャンパス(東京都八王子市)

④　村上和弘、「対馬は<国境の島>だったのか？：戦後対馬における<国境>性と<離島>性」、第 37 回中四国人類学談話会、2012.11.17 発表、於・県立広島大学広島キャンパス(広島県広島市)

⑤　村上和弘、「戦後対馬における「変則貿易」をめぐって」、日本島嶼学会 2012 年次大会、2012.09.09 発表、於・海士町隠岐開発総合センター(島根県隠岐郡海士町)

⑥　村上和弘、「近現代対馬における「越境」の記憶とその利用」、日本文化人類学会第 45 回研究大会、2011.06.12 発表、於・法政大学市ヶ谷キャンパス(東京都千代田区)

〔図書〕（計　2 件）

①　村上和弘(2015)　『近現代対馬の「日韓交流」に関する文化人類学的研究』、韓国・蔚山大学校(博士論文、原題・原文とも韓国語)

②　村上和弘 他(2014)、『対馬の交隣』、交隣舎出版企画、pp.17-30 & pp.152-156

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　０件）
○取得状況（計　　０件）

〔その他〕
http://dcollection.ulsan.ac.kr/upload/temp/source/000000019964_1433151946181_0.22353937484493758.pdf

６．研究組織
(1)研究代表者
村上　和弘（MURAKAMI, Kazuhiro）
愛媛大学・国際連携推進機構・准教授
研究者番号：４０３６３２６２

(2)研究分担者（該当なし）

(3)連携研究者（該当なし）